



響（甲佐グリーンハーモニー）

うたごよみ 睦月

「短歌」

渡辺幸士 選

「下手でいい」「下手がいい」のお誘いに絵  
手紙教室通い始める 内田乃武子  
はなれ住む孫の安否を想いおり老い行く吾は  
夕べの庭に 井上ユリ子  
真っ白に立ち込む霧よりあらわるる学童の列  
笑顔のあいさつ 上村 かず  
異常なる寒暖の差も雨脚も野良の段取り狂わ  
せており 吉永由紀子  
暖冬に夏の花々残りいてはや水仙と並び咲き  
おり 上村やす美  
未だ暗き秋雨の朝師は逝けり夜明けを待たず  
落暉も待たず 内山タミエ  
脱穀の音に消されて会話なく「あ・うん」の  
呼吸で作業を終える 緒方 明美  
いつ迄も温き冬の日手をかざし飛行機雲の尾  
を眺めおり 赤星 延子  
セールの旨い話に巻き込まれいつしか吾も  
餌食のひとり 塚原 晁益  
何故と問いつつも詠むわが短歌に未完の気持  
ち常にまつわる 本田富美子  
スケートの鈴木演技美しく神技の如きと吾  
は見惚るる 松本ぬい子  
よき朋に支えられつつ生きる世の残りの時間  
の健やか願う 森田 房恵  
電話鳴り「奥様ご在宅ですか」「はい天界に」  
声無く切れる 渡辺 幸士

「川柳」

渡辺幸士 選

「クリスマス」「師走」

被災地の友をよろしくサンタさん 北 仁子  
クリスマス色々あったこの一年 布田 愛子  
サンタさん未来に希望連れて来て 古閑チヨミ  
信徒で無いが謙虚に過すイブの夜 丸岡はる子  
師走風老いの気儘な冬支度 成松 松枝

「悔い」

悔い残し今年の暮れも余日なし 林 雅之  
悔しいが蹴飛ばす石もそこに無し 早 彦喜  
人生に悔いは後から付いて来る 緒方 瑞枝  
先走り一口多い悔いの種 伊豆野ヤエ  
続編は要らぬ人生悔いは無し 渡辺 幸士

「俳句」

山茶花の 一花早や咲く朝戸かな 田端 慶子  
湯上りのほてりピンクに嬰の頬 堀田 孝恵  
鈴なりの熟れゆく柿よ夕日に映ゆ 本田 信子  
シンクローの妙技に更けて夜の秋 楠本 美鶴  
その昔明治節とて袴穿き 古田 幸子  
石路の花独りの庭を明るくす 高田れい子

■お問い合わせ先 町教育委員会公民館事務局  
☎096・234・1111（内線321）

# ひとの動き (敬称略)

11月11日(金)~12月10日(土)

## birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
中山	北川 海翔	男	慎 弥明
横田	篠原 颯汰	男	由良 明介
横田	小柳 優月	女	智 則崇
緑町	坪根 眞哉	男	文 浩太
仁田	山口 龍之介	男	文 浩太
横田	坂村 惺愛	女	博 太一
早川	富永 藍凜	女	博 太一

## marriage ご結婚おめでとう

住所	氏名
宇城市	長岡 真一郎
大町	堀 明希子
船津	北野 誓司
熊本市	緒方 千香子
田口	宮西 睦
熊本市	大石 芽衣
下横田	堀内 怜
熊本市	山崎 沙弥香
菊陽町	宮川 俊弘
豊内	村上 えり
熊本市	松倉 千代志
糸田	櫛山 琴美
大町	角張 広幸
熊本市	三尾 真世

## condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
白旗	田上 夕マ子	94	夕マ子
仁田	村上 親雄	84	ミサ子
仁田	舛田 法子	78	博文
大町	野村 キミエ	88	立巳
豊内	甲斐 澄江	89	澄江
西原	西坂 信子	83	昭一
西原	栗林 ハルエ	93	ハルエ
上揚	赤星 照子	78	出
横田	田添 フジ子	100	フジ子

## Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,424	17
女	6,075	△10
計	11,499	7
世帯数	4,214	2

平成23年11月30日現在

〔町史編さんだより〕

中世の甲佐社は肥後国二宮として、竹崎季長をはじめとする鎌倉武士の信仰を集めたことで知られます。そのころの甲佐社では、どのような祭礼が行われていたのでしょうか。

「阿蘇家文書」には、永31(1424)年に作成された「海東郷三宮公事日記」(阿蘇家文書『大日本史料阿蘇家文書之一』247号)や「甲佐社神田注文」(同前251号)といった中世の祭礼記録があり、これを『肥後国誌』に収録されている延宝5(1677)年の「甲佐祠記」(時の阿蘇大宮司が作成)の記載で補えば、中世甲佐社の祭礼体系をある程度復元することが可能となります。

肥後国二宮として知られる甲佐神社



## 甲佐の歴史を紡いで

~町史編さんだより(39)~

## 中世甲佐神社の祭礼と信仰

町史編集委員 稲葉 継陽 (中世)

「甲佐祠記」によれば、中世甲佐社の祭礼は、じつに1年間に48度あったとされます。そのうち最大のものは、5月5日、6月29日、9月9日の3回であったと記されています。5月5日

と9月9日はそれぞれ端午の節句と重陽の節句ですが、このときは現在の宇城市方面にも広がっていた社領から神馬が献ぜられて流鏝馬(やぶさめ)が執行され、また相撲が奉納されました。

「甲佐祠記」のいう6月29日の祭礼は夏越会(なごしえ)と考えられます。これは田植えの終了を祝い、豊作を予祝し、田植え後の農作業に入る節目として、農事曆上に位置づけられている祭礼でした。

このように中世の甲佐社の祭礼は、正月、五節句、夏越会の祭礼を基軸に、中世民衆の生活にもなじみ深い数々の年中行事によって構成されていました。中世甲佐社は竹崎季長のような武士からだけではなく、町民の先祖にあたる生産者民衆からの信仰をも、ひろく集めていたのでしょう。

▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先  
町社会教育課町史編集係  
☎096・234・3310

## 編集後記

地球規模で大きな事件や事案が頻発し、既存の概念について変革を求められた2011年。大震災や革命、事件などが相次ぎ、「生命」の重みと改めて向き合い、エネルギー問題などで大きく様変わりした「生活」を迫られた1年。続発する懸案は、従来のテレビなどのメディアよりも、インターネットを介して現地にいる一般人からライブ発信される「生の情報」のほうが速報性に優れ、事実をありのままに伝達し波及した1年。

21世紀2度目の10年の始まりは、「生」というキーワードを世界に突きつけ、なお一層速まった情報化社会の体感速度。地球の大きさは同じでも、さらに広くて速くなる世界地図の彩りの変化。この10年で根付く常識を模索する年となる2012年。身近な変化から、時代に焦点を当てたいものです。(C)